

F. チェニーを通してみるアメリカにおける レファレンスサービス論成立期の検証

前 川 和 子

要 旨

アメリカにおけるレファレンスサービス分野の代表的人物の一人であるフランシス・ニール・チェニー (Frances Neel Cheney, 1906-1996 以下F. チェニー) は、第二次世界大戦直後の1951年に、慶應義塾大学文学部の日本図書館学校において日本人にレファレンスを教育した。これは日本における本格的なレファレンスサービスの教育であった。

彼女は、図書館学教育をヴァンダービルト大学、ピーボディー図書館学校、シカゴ大学大学院図書館学校、コロンビア大学図書館学校で受け、コロンビア大学で、ハッチンス (Margaret Hutchins, 1884-1961) からレファレンスサービスを学んだ。Introduction to Reference Workの著作で著名な人物である。

本稿では、まずF. チェニーがレファレンスサービスを学び、教えた時期と、米国でレファレンスサービス論が確立された頃との重なる検証を試みた。さらに、1971年のガルヴィン著のレファレンスサービス・ケーススタディ書との関わりによって、新しいレファレンスサービスの教育方法が模索されていた時代にも位置していた人物であることも確認したいと考えるものである。このため、ヴァンダービルト大学図書館に保存されているSpecial Collectionsの“Brainard and Frances Neel Cheney Papers”やその他の文献を考察材料として使用した。

キーワード：F. チェニー、アメリカにおけるレファレンスサービス論、日本図書館学校

1. はじめに

フランシス・ニール・チェニー (Frances Neel Cheney, 1906-1996 以下F. チェニー) は、アメリカにおけるレファレンスサービス分野の代表的人物の一人である。1906年生

まれのF. チェニーは、第二次世界大戦直後の1951年に、日本で初めての学部教育であった慶應義塾大学文学部の日本図書館学校¹⁾において日本人にレファレンスを教育した。これは日本における本格的なレファレンスサービスの教育であった。

彼女自身は、図書館学教育をヴァンダービルト大学、ピーボディー図書館学校、シカゴ大学大学院図書館学校、コロンビア大学図書館学校で受けた。そして1940年にコロンビア大学図書館学校から図書館学理学修士を受けたのであるが、このコロンビア大学で、ハッチンス (Margaret Hutchins, 1884-1961)²⁾ からレファレンスサービスを学んでいる。日本においても彼女の名は、Introduction to Reference Workの著作で知られている。

また日本のレファレンス分野においては、長澤雅男監訳のS. ローススティーン (Samuel Rothstein, 1921-)のレファレンスサービス論³⁾も有名である。S. ローススティーンはアメリカのレファレンスサービス (特に研究図書館) の発生からそれが確立されたといわれている1940年代までをまとめており、アメリカでの公刊は1955年であった。

以上のように、F. チェニーがレファレンスサービスを学び教えた時期は、米国でレファレンスサービス論が確立された頃と重なりがある。本稿は彼女が、アメリカのレファレンスサービスにどのように関わったかの検証を試みたものである。またさらに、彼女の晩年1971年に、ガルヴィンのレファレンスサービスのケーススタディ書に序文を書いていることから、新しいレファレンスサービスの教育方法が模索されていた時代にも位置していた人物であることも確認したいと考えるものである。本稿では文献を中心に考察し、ヴァンダービルト大学図書館に保存されているSpecial Collectionsの“Brainard and Frances Neel Cheney Papers” (以下、「F. チェニーのファイル」) をも使用した。

先行研究

アメリカにおけるレファレンスサービスの発生と発展に関する研究は、日本においては多いとはいえない。阪田容子が戦前の日本のレファレンスサービスの移入と戦後日本図書館学校におけるF. チェニーの教育を『図書館ハンドブック 第5版⁴⁾』において簡潔に記載している。しかし、同ハンドブックの第6版⁵⁾や『図書館情報ハンドブック⁶⁾』に記載はない。西田ほかの『情報サービス⁷⁾』は、1876年にS. S. グリーン (Samuel S. Green) が「人的援助」を提案してからの、公共図書館と大学図書館におけるレファレンスサービスの発展を簡単に説明している。この記述の中に、M. デューイ (Melvill Dewey)、A. B. クロガー (Alice B. Kroger)、1930年代にはワイヤー (James I. Wyer) といったレファレンスサービスの発展に貢献した人物が紹介され、定義の紹介では1930年代・40年代に限定すると、ワイヤーの他にアメリカ図書館協会 (American Library Association: ALA)⁸⁾、ハッチンスの名がある。

アメリカ、日本を問わずこの分野の代表的著作は、S. ローススティーンの『レファ

『レファレンスサービスの発達』であるといわれている。彼の著書がアメリカで出版されたのは1955年のことであるが、日本で翻訳が出版されたのは1979年である。この中でレファレンスサービスについて監訳者の長澤雅男は、このサービスを生み出したアメリカにおいてもレファレンスサービスの歴史が浅いという。「アメリカでは最初からレファレンス・サービスが図書館固有の機能として認められてはいなかったこと…その歩みは決して順調ではなかった。…1940年代には、アメリカの社会では、おおむねレファレンスサービスは図書館固有の機能として一般に認められるようになっていた⁹⁾」と解説している。

2. F. チェニーとレファレンスの出会い

F. チェニーは、1906年8月19日ワシントンD.C.に生まれた。幼少時は、ジョージア州フィッツジェラルドで過ごした。アメリカ南部は両親の故郷であり、チェニーの曾祖父は南北戦争の有名な将軍であったという。

1924年にヴァンダービルト大学 (Vanderbilt University) に入学し、1928年6月ヴァンダービルト大学 (社会学) から文学士を受けた。彼女は在学中から図書館に興味を持ち、1925年秋からヴァンダービルト大学図書館で学生アシスタントとして働いていた。

2.1 大学卒業後、図書館のレファレンス部門勤務

卒業後1928年から同大学図書館の化学部門で図書館司書として働き、1929年から同大学図書館貸出・返却部門のヘッドとなった。1930年には、ヴァンダービルト大学図書館レファレンス部門のヘッドとして1937年まで働き、その後ヴァンダービルト大学は他の2つの大学と合併するのであるが、その合併されたジョイント・ユニヴァーシティ図書館レファレンス部門でもヘッドとして1943年まで働いた。このように大学図書館で図書館員として働きながら、同時にピーボディー図書館学校 (Peabody Library School) のパートタイム学生でもあった(1934年まで)。この間ヴァンダービルト大学大学院で英語、歴史、ラテン古文书学を履修した(1937年まで)。その甲斐あって、1934年夏には、ジョージピーボディー教育大学から図書館学理学士を受けた。

2.2 レファレンスを深める

彼女は図書館員のかたわら、1937年シカゴ大学大学院図書館学校 (Graduate Library School, University of Chicago) の夏期コースで学び学位を取得した。

2.3 コロンビア大学修士課程 (1938年9月—1939年6月)

1938年9月さらに、コロンビア大学図書館学校の修士課程に進学し学んだ。コロンビア大学図書館は、図書館員のイサドア・マッジ (Isadore Gilbert Mudge, 1875–1957)¹⁰⁾ によって、大学図書館のレファレンスサービスが定着し国内で有名になった図書館である。マッジは、「基本的な参考図書のご案内を作り、これはその後のウィンチェル女史、

さらにはシーヒ氏に引き継がれ、『参考図書のガイド』という題名で、図書館の基本的なツールとなっている。¹¹⁾ また、コロンビア大学では1887年から学部レベルの図書館学科が始まり、1926年から大学院図書館学科となった。この学科は、「ウィリアムソン報告」の影響により設置されたものであり、ウィリアムソン (Charles C. Williamson, 1877-1965) は選ばれて学科の責任者と同時に、大学図書館長を兼任した。¹²⁾ マッジはのちにこの図書館学校で教員として教え1941年に引退したが、優秀な学生が彼女のあとを継いだ。一人はハッチンスであり、もう一人はウィンチェル (Constance M. Winchell, 1896-1983) であった。ウィンチェルは Guide to Reference Books で日本でも有名な人物である。F. チェニーはこの大学で、ハッチンスの教えを受けることになる。

2.3.1 ハッチンスとの出会い

ハッチンスは、イリノイ大学図書館学校で、フランシス・シンプソンに学び、図書館学理学士を優秀な成績で取得した。卒業後、公共図書館等で勤務したが、コロンビア大学でマスターを取得することにし、イサドア・マッジのもとで学んだ。1931年にコロンビア大学の講師となった。F. チェニーが1938年から1939年にかけてコロンビア大学で学んだ時は、ハッチンスが教員になったまだ初期の頃であったといえよう。ハッチンスはまた初期の著作に『図書館使用のガイド：大学生のためのマニュアル』¹³⁾ があるが、これは1920年に初版が刊行されてから1935年まで5版を重ねたというものであった。

2.3.2 ハッチンスの理論

日本でもハッチンスのレファレンスの定義はよく知られている。第二次世界大戦直後に行われた現職図書館員のための研修会用テキストであった『図書館学講義要綱改訂版』¹⁴⁾ に取り上げられている。また、志智嘉九郎の『レファレンス・ワーク』¹⁵⁾ や、『図書館ハンドブック 第5版』¹⁶⁾ などにも記述がある。戦後すぐのテキストに紹介されているのは、アメリカを代表するレファレンスの専門家という認識が当時すでにあったからであろう。彼女の著作 (1944年) は、「レファレンスワークの原則と理論」を扱っている。ハッチンスの発見的手法として知られている、資料のタイプと具体的主題による質問を分類するレファレンス手法は、近代アメリカのレファレンスライブラリアンに基盤として利用され続けてきた。¹⁷⁾ 彼女は、レファレンス質問を4つのタイプに分析した。1つは書誌に関する質問、2つ目は人についての質問、3つ目は歴史と地理についての質問、4つ目はカレントな質問・戦略的な質問である。この手法をF. チェニーが戦後すぐの時期に日本で伝えた。戦後すぐに行われた現職図書館員を再教育するための司書講習において使われた教科書は上述のように『図書館学講義要綱改訂版』(1952年版) であるが、その中の「参考質問とその取扱い方」に、伝記、人名に関するもの、歴史地理に関するもの、統計に関するもの、時事情報に関するものなど、に分けて記述されて、ハッチンスの手法が紹介されているのである。¹⁸⁾ しかし、この改訂版の原稿段階ともいえる1951年

¹⁹⁾版には、このような分け方は書かれていない。初版（1951年）と改訂版（1952年）の間には、F. チェニーが日本図書館学校のレファレンス教授内容と現職図書館員の再教育にも携っていたことが影響を与えているのではないかと考えられる。

後に長澤は日本図書館学校の教員となったが、その長澤が作ったテキストにもこの手法が使われている。長澤が1969年以来作成したレファレンス関係テキストは数種類あるが、現在もなお改訂され国内の大学司書養成課程の講義で使用されている。

さて、当のハッチンスの授業クラスなのだが、レファレンスにおける問題をディスカッションでアプローチする方法を採用した。

2.3.3 教師と学生

上述したようにF. チェニーは、ハッチンスの教員として初期の学生であった。F. チェニーはハッチンスについて次のように記している。「マーガレット・ハッチンスは、素晴らしい申し分のない教師でした。もっとも彼女は難しい試験で学生たちを悩ませましたけど。彼女は教えることに公正であり、講義はきちんと整理され明解でした。ミス・マッジ²⁰⁾が退官した後、彼女のあとを引き継ぎ、ミス・マッジの支援無しで周到なレファレンスワークを行いたいという望みを持って、学生たちを鼓舞したのです。彼女はまた静かで控え目で、立ち居振る舞いで快活な人でありました。」²¹⁾ハッチンスの講義に使われたと思われるプリントがヴァンダービルト大学のSpecial Collections: Brainard and Frances Cheney Papers²²⁾に残っていた。Columbia University School of Library Service 1938-1939とプリント左上に表示がある。講義名はLibrary Service 361で、Margaret Hutchinsの名がみえる。第8回目の講義内容は、Bibliography and reference、Biography（伝記）についてであった。ハッチンスの講義内容を知る上で貴重なものといえよう。（図参照）

前述のとおり1940年6月にチェニーは、コロンビア大学から図書館学理学修士を受けた。

3. ピーボディ図書館学校とアメリカ議会図書館での勤務

3.1 ピーボディ図書館学校でのレファレンス教育

F. チェニーは1943年まで正規の大学図書館員として働いていたが、同時に1941-1943年および1945年にピーボディ図書館学校のパートタイム講師として教えた。ただし1943-1945年は、彼女はピーボディ図書館学校にはいず、夫チェニーとともにワシントンD. C. にいた。²³⁾1945年に再びピーボディ図書館学校に戻ったのである。

1945-1949年に同図書館学校で、彼女はassistant professor（助教授）の地位を得た。そして、1949-1967年には、同図書館学校のassociate professor（準教授）を務めるこ

とになる。

この間R. ギトラー (Robert L. Gitler, 1919–2004)²⁴⁾ の要請を受けて、1951–1952年の18ヵ月間、慶應義塾大学文学部日本図書館学校の訪問教授として一時ピーボディ図書館学校を離れ来日した。

帰国後には、ピーボディ図書館学校で学長代行 (acting director) 等をつとめ、1967年からは、ピーボディ図書館学校・図書館学学校、ジョージ・ピーボディ教育大学の教授として引き続き教育に携わった。²⁵⁾

3.2 書誌の連載とアメリカ議会図書館勤務

1942年11月から彼女のライフワークともいえるべき“Wilson Library Bulletin”のコラム記事“Current Reference Books”の連載が始まった。²⁶⁾ 1943–1945年は、上述のようにワシントンD. C. にいたのだが、友人のアラン・テイト (Allen Tate, 1899–1979)²⁷⁾ によまれて1943年から1944年はアメリカ議会図書館詩部門 (the chair of poetry, Library of Congress) のアシスタントとして勤務した。その後1944年から1945年は、同図書館総合一般参考・書誌部門で書誌作成者として働いた。

F. チェニーは書誌作成を重要なものと考えていたようだ。彼女は、コロンビア大学時代にハッチンスから、主に2つのことを教えられた。1つは、レファレンスとは利用者援助であり、図書館員のほうから積極的に手を差し伸べることであること、2つ目は二次資料 (書誌) の作成である。レファレンスサービスにおいて不足する二次資料があれば、図書館員が自ら作成することをである。これはレファレンスブックスが十分でなかった1920–1940年代の図書館員の仕事の特徴であったといえる。ハッチンスは、もと図書館員で、しかも優秀な図書館員であったため利用者に役立つことが何であるかを知っていたのである。

F. チェニーにおいては、ハッチンスの教育とその後始まった上述のコラム記事“Current Reference Books”の連載、そして議会図書館での書誌作成実務が彼女の書誌作成能力を形作ったと思われる。この経験に裏打ちされて、日本での教育、日本図書館学校において書誌作成演習が取り入れられたと考えられる。F. チェニーは学生たちに作成させた書誌解題を文字幸子とともに『日本の参考図書解題』²⁸⁾ として編集・作成した。²⁹⁾

4. F. チェニーとレファレンス：50年代以降の検証

4.1 50年代の検証

4.1.1 アメリカにおける50年代のレファレンスサービス

40年代のアメリカにおいて、図書館における一般的なサービスとして認められたレファレンス・サービスは、50年代においてより確かな図書館サービスとなった。

4.1.2 アメリカ図書館研究調査団 (U.S. Field Seminar on Library Reference Services of Interest to Japanese Librarians) とF. チェニー

F. チェニーが1952年にアメリカに帰国後、日本では国際会館の福田直美などを中心にアメリカ図書館研究調査団が企画された。それは1959年に実現される。迎えるアメリカ側はALAが主催し受け皿になったが、その委員長はF. チェニーであった³⁰⁾。彼女は日本の図書館員を受け入れるため大いに努力をしたといわれている。このプログラムは、レファレンスサービスに焦点を当てたものであり、日本のレファレンス関係者、各館種から9名の図書館員を2か月間アメリカ各地で見学と討論を通して学ばせるというものであった。アメリカ側の真の目的は、「アメリカの図書館のレファレンスサービスをフィールドで実地に研究すること……当初のアメリカ側の思惑は、日本の図書館サービスの活発化による日本の民主化であり、図書館の社会的地位向上であり、そのためにトップレベルである図書館長を訪米させて、図書館経営を学ばせることに傾いていた。」というものであった。しかし、このプログラムの中心人物であった福田はレファレンス・サービスを中心に図書館を視察することを希望し、結果的にALAの全面的な協力を得てプログラムもそのように組まれたという³²⁾。このプログラムのスケジュールは、表としてまとめられている。このプログラムによって、アメリカでの訪問図書館を知ることができる。「セミナー日程と討議内容」のリストによると、訪問した大学図書館は、カリフォルニア大学 (パークレーとロスアンジェルス)、ジョイント・ユニバーシティ図書館、公共図書館は、ニューヨーク公共図書館ドンネル貸出部、フィラデルフィア公共図書館、テネシー州立図書館であった。いずれも当時レファレンスで先駆的な活動をしていた図書館であることは間違いないであろう。また、シカゴのALA、ワシントンのアメリカ議会図書館 (Library of Congress) の訪問を行っている。

4.2 60年代以降の検証

4.2.1 アメリカにおける60年代以降のレファレンスサービス

長澤によると、アメリカにおけるレファレンスサービスは、「1960年代以降から、伝統的なサービスに加え、新たに情報検索サービスが導入されることによって、サービスの高度化、多様化が促された³⁵⁾」という。大規模図書館になると、書誌的知識ならびに専門主題の知識を持った主題専門家によるサービスも試みられるようになった。また、当時の大学では情報検索を担当する部門が設けられ始めたが、情報検索サービスはやがて図書館において伝統的なマニュアル手法のサービスと統合されてくるのである。「1965年以来、レファレンス情報サービス (reference and information service) という呼称が普及し、その後、単に情報サービス (information service) とよばれることが多くなったのも、オンライン情報検索サービスの導入、情報源としての電子メディアへの依存度

の高まりなどによるサービス内容の変化³⁶⁾があったのである。

4.2.2 F. チェニーの60年代以降

1971年刊のガルヴィンのケーススタディ本³⁷⁾に、F. チェニーは序文を書いている。ガルヴィンはこの本の中で、それまでのレファレンスサービスの教育法では充分でないことを語っており、その彼の主張に対して、F. チェニーは肯定的であるように思われる。それまでのレファレンスサービスの教育内容とは、「…講義、指定図書の読書および多分にその読書に基づくクラス討論によって、伝統的に実施されてきた³⁸⁾」ものであった。そして、具体的には「参考質問の分析のスキルの獲得とそのソース的資料との関係、図書館調査法の方法論の学習への機会の提供、および利用すべき情報源の範囲と種類の広い理解を学生の側に展開させることを…」というものであったが、ガルヴィンは、「…複雑な人間的要素が現れてその結果に決定的な影響をおよぼすこと…司書は種々の図書館事情のもとに働くもの…」であるということで、レファレンスサービスにおけるケーススタディの必要性のもとにテキストを作成したことを説明している。F. チェニーはその序文に、「レファレンス・ライブラリアンが経験を積むまでには、サービスの歳月を重ね、時には苦痛を忍びながら、レファレンス行動にはインフォメーション資料源の知識より以上のものが含まれていることを学び取るのである」と彼の言を認めて、「真に要求されていることは特殊化…特殊な状況の中において、その判断力、公式化した政策、行動の計画コースを訓練するように迫るものである³⁹⁾」と様々な利用者に対するレファレンスサービスの困難さを指摘している。初期のレファレンスサービス、つまり資料と利用者を単に結びつけることに比べ、多様な利用者に対する対応の困難さがこの時代に出現したことを物語るのではないかと思われる。

5. まとめ

R. ギトラーは、日本図書館学校創設時校長に任命された人物であるが、レファレンスの専門家としてF. チェニーを日本に招聘した。訪問教授はすべて米国人であった、F. チェニーの他に、テクニカル・プロセス、目録、分類のフリック (Frick, Bertha Margaret 1894-1975)⁴⁰⁾、児童青少年分野のハナ・ハント (Hunt, Hannah)⁴¹⁾、視聴覚資料担当のラーソン (Larson, Edgar R.)⁴²⁾、そして、図書館学校図書室を創るためのフィリス・ジーン・テーラー (Taylor, Phyllis Jean) が選ばれた人たちであった。R. ギトラーは日本での使命を実行するためにアメリカ人専門家の選考基準を持っていた。F. チェニーがレファレンスの第一人者であることのように、他の3人もその分野の専門家であること、そしてもうひとつの基準は、人格的にも優れた人物であること、これにも合致した人物であると評価していた⁴³⁾。R. ギトラーはじめ、招かれた教師陣は、日本図書館学校において当時最

新のアメリカ図書館学を教授し、F. チェニーはアメリカ国内で確立したばかりのレファレンスサービスを教えたのであった。一方で彼女は1942年から退職する1972年までの30年間レファレンスブックの解説を続けた。この間に彼女が解説したレファレンス資料は5,819冊にのぼった。教育と共にレファレンス資料についての専門性を追求したことによって、彼女のレファレンスの専門家としての軸はずれなかったといえる。

F. チェニーはハッチンスのレファレンスサービス論を正確に継承した正統派ともいえ、日本にそれを伝えた人であったが、新しい時代のレファレンスサービスの教授法への寛容さも示した人であった。ガルヴィンの著書の内容を認め、序文を書いたことがこれを証明している。またそれは、新しい時代のレファレンスサービスを受け入れる寛容さを持つ人物として、新しい時代のカルヴィンに認められていた人物ともいえる。

注

- 1) 日本図書館学校開設の経緯については、以下の文献が詳しい。
三浦太郎、根本彰「占領期日本におけるジャパン・ライブラリースクールの創設」『東京大学大学院教育学研究科紀要』vol.41, 2002. 3, p.475-489.
- 2) ニューハンプシャのランカスター生まれ。Smith Collegeを1906年卒業。在学中はPhilosophical ClubとLiterary Societyのメンバーだった。University of Illinois 2-year courseで学び、Bachelor of Library Science degreeを受けた。また、Columbia UniversityからMaster's degreeを取得した。指導を受けたIsadore Gilbert Mudgeのあとを継ぎColumbia School of Library Serviceの教員になった。
Introduction to Reference Work, ALA, 1944, 214p.は、ハッチンスの代表作である。
- 3) Samuel Rothstein The development of reference services through academic traditions, public library practice, and special librarianship, Association of College and Reference Libraries, 1955, ix, 124p.
日本語訳 サミュエル・ロースステーション、長澤雅男監訳『レファレンスサービスの発達』日本図書館協会, 1979, 256p.
- 4) 阪田容子「レファレンス・サービス」『図書館ハンドブック 第5版』日本図書館協会, 1990, p.89.
- 5) 『図書館ハンドブック 第6版』日本図書館協会, 2005, 652p.
- 6) 『図書館情報ハンドブック 第2版』丸善, 1999, 1145p.
- 7) 『ALA図書館用語集』
- 8) 西田文男監修；志保田務、平井尊士編著『情報サービス：概説とレファレンスサービス演習』学芸図書, 1999, 199p.
- 9) 前掲3) 日本語訳, p.239-240.
- 10) Guide to Reference Booksを編集し、これを図書館の基本ツールとして定着させた。マジジは第6版（1936年）まで編集、第7版よりコンスタンス・ウィンチェルが編集。日本においても「ウィンチェルのGuide to Reference Books」として大変有名である。このようにコロンビア大学図書館では、多くの学術図書館員を育てた。（藤野幸雄編著「イサドア・マジジ」『図書館を育てた人々：外国編Ⅰアメリカ』日本図書館協会, 1984, p.164-172.）
- 11) 藤野幸雄『資料・図書館・図書館員：30篇のエッセイ』日外アソシエーツ, 1994, p.44.
- 12) 19世紀末から20世紀初めにかけて、カーネギー財団は米国で1600館以上の図書館を建設・

寄付したあと、図書館員養成へ支援を行った。その過程で作られたのが、1923年の「ウィリアムソン報告」である。その内容は、養成は大学院教育を標準とすること、専門職養成機関を認定する組織が必要であることなどである。

- 13) Guide to the Use of Libraries: a Manual for College and University Students H.W. Wilson 初版は1920年 第5版は1936年
- 14) 図書館専門職員養成講習第1回指導者講習会原編；日本図書館協会編『図書館学講義要綱改訂版』日本図書館協会, 1952, 116p. うちp.71-84が「レファレンス・ワーク」
この中の「解説」に「A-1 においては、Kroeger, Mudge, Hutchins等の説を参照して一定の定義づけを行い、レファレンス・ワークの限界に触れる」とある。(p.71)
ただし、前年度作成された教科書(初版)には、参考文献として掲載されているのみである。『図書館学講義要綱：昭和26年度・図書館専門職員養成講習第1回指導者講習会』日本図書館協会, 1951. 8, p.67.
- 15) 志智嘉九郎『レファレンス・ワーク』日本図書館研究会, 1987. 5, p.278. (1962の覆刻)
- 16) 前掲4) p.88.
- 17) John V. Richardson “Hutchens, Margaret (21 September 1884 · 4 January 1961)”
〔引用日：2004-02-15〕〈<http://polaris.gseis.ucla.edu/jrichardson/DIS220/mhutchins.htm>〉
- 18) 前掲14) (1952) p.72「参考質問とその取扱い方」の「D 質問内容」として示されている。
- 19) 前掲14) (1951)
- 20) イサドア・マジジのこと
- 21) 前掲17)
- 22) ヴァンダービルト大学のSpecial Collections: Brainard and Frances Cheney Papersは、全部で90のBoxから構成されている。
〔引用日：2011-03-06〕〈<http://www.library.vanderbilt.edu/speccol/cheneylist3.shtml>〉
この中で、F. チェニーの資料はBox56-Box90に収められている。現物のコピーを日本図書館学校を中心にヴァンダービルト大学図書館より取り寄せた。この資料はその中に納められていた。
- 23) 彼女は、1928年6月21日にテネシー州ナッシュビルで、ブレイナード・チェニーと結婚した。夫ブレイナードは、小説家、文芸評論家、政治記者、スピーチライター、劇作家として40年に及ぶ作家生活を送った人で、一時期*Nashvill Banner*の政治評論家 (police reporter) であった。南部の色濃い20世紀作家である。フラナリー・オコナー、アラン・テイトラとの親交でも有名である。
- 24) R. ギトラーは、日本図書館学校の初代ディレクター。
「彼は初め在任一年の予定で、ワシントン大学から休暇を採って来日した。その時は日本占領軍の招聘によったものであったが、任期中、平和条約の調印によって援助が打ち切られるはめになった。それでは図書館学科の存続はむづかしい。そこでロックフェラー財団からの肩替わりをえる努力をし、彼自身もワシントン大学の好位置を棒に振って、滞在を延期し、学科の基礎確立のために挺身した。そして五年後、藤川正信・中村初雄・浜田敏郎・渡辺茂男の四人の教員を養成し、後遺の憂なく、次の主任橋本孝に席を譲って日本を去った。…人生の一番良い、働き盛りの期間を図書館学科の建設のために献身した功績は、高く評価されねばならない。」〔伊東弥之助〕『慶応義塾図書館史』慶応義塾大学三田情報センター, 1972, 348p.
- 25) 1975年夏にジョージ・ピーボディ教育大学から、名誉教授の称号を受け引退した。
- 26) 約30年後の1972年6月に、月刊レヴュー・コラムである“Current Reference Books”の編集者を辞退した。
- 27) 南部Fugitive groupにチェニー夫妻とともに属する詩人。彼の妻はCaroline Gordon。

- Southern Renaissanceにおいてだけでなくthe modernist movement in literatureとしても大きな影響力を持つ詩人・作家であったといわれる。1943年からLCのChair of Poetry。彼女はテイトが編集者であるLC発行の主要な書誌作成に関わった。後年テイトは、書誌Sixty American Poetsは実はチェニーが作成したのだと告白している。2人の友情は、彼が亡くなる1979年まで続いた。
- 28) 文字幸子は『慶應義塾大学文学部日本図書館学校学校案内昭和28年度』p.2に、「書誌学助手」とある。
- 29) Frances Cheney and Yukiko Monji edited An annotated list of selected Japanese reference materials, Japan library school faculty of Literature Keio Gijyuku University, 1952, 36p. 別タイトル：日本の参考図書解題
- 30) 小出いずみ「福田直美とアメリカ図書館研究調査団」『現代日本の図書館構想』勉誠出版, 2013, p.213-248.
- 31) 前掲30) p.236. なお、この調査団の名称を藤野幸雄は「日本の図書館員のための図書館参考業務フィールドセミナー」とよんでいる。前掲11) p.44.
F. チェニーが月刊レヴュー・コラム“Current Reference Books”引退後の特集記事に、R. ギトラー、藤川正信とともに福田直美もお祝いのメッセージを書いている。
“Friends salute the professions number-one reference reviewer: omedeto gozaimasu, Cheney sensei!” Wilson Library Bulletin, 47(1) Sep. 1972, p.86-88.
- 32) 前掲30) p.247.
- 33) 前掲30) プログラムのスケジュールは、p.236-237およびp.238-239.
- 34) F. チェニーが所属していた大学の図書館
- 35) 長沢雅男『レファレンスサービス：図書館における情報サービス』丸善, 1995. 3, p.48.
- 36) 前掲35) p.49.
- 37) Thomas J. Galvin Problems in reference service: case studies in method and policy, R.R. Bowker Co., 1965, xix, 177p. (Foreword by Francis Neel Cheney)
日本語訳、トマス・J. ガルヴィン；弥吉光長、前島重方訳『社会と図書館：参考業務問題のケース・スタディ』日本図書館協会, 1970, 253p.
- 38) 前掲37) 日本語訳, p.19.
- 39) 前掲37) 日本語訳, 序
- 40) Columbia library schoolの教員。米国で長年整理技術分野の重要人物の1人と、ギトラーは評価している。
Sears list of subject headingsの編集者としても名高い。Minnie Earl Sears (1873-1933)のその第6、7、8版の改定を担当した。
Sears list of subject headings. 6th ed. by Bertha Margaret Frick. H. W. Wilson, 1950, xxx, 558p
Sears list of subject headings : with practical suggestions for the beginner in subject heading work. 7th ed. by Bertha Margaret Frick. H. W. Wilson Co., 1954, xxviii, 589p.
Sears list of subject headings : with suggestions for the beginner in subject heading work. 8th ed. by Bertha Margaret Frick. H. W. Wilson Co., 1959, 610p.
- 41) ロックフォード公立図書館 (Rockford Public Library) からギトラーに請われて来日。児童とヤングに対するサービスの専門家。
- 42) ラーソンは、ギトラーがワシントン大学で視聴覚資料コースを設立しようとした時出会った人物である。彼はLCにもいたことがある。
- 43) Robert L. Gitler ; Michael Buckland edited Robert Gitler and the Japan Library School : an autobiographical narrative. Scarecrow Press, 1999, p.48.
- 44) 前掲26)

Columbia University
School of Library Service
1938-1939

Library Service 361
Margaret Hutchins
No. 8

BIBLIOGRAPHY AND REFERENCE

Gathering Material for a Biography

DIRECTIONS:

The class will be divided into "reference departments." Each department is directed to see what printed material and what leads to unprinted material it can find on the person assigned and make oral and written reports by December 12.

The written reports are to include

- ✓ 1. A tabulation of the kinds of information found (following in general the outline of a good biographical dictionary article) with references to sources of information by abbreviations (a key to the abbreviations at the head).
- ✓ 2. Names of persons or institutions who might have unpublished material.
3. Summary of the most useful clues found.
4. Plan on which the work of the "department" was organized.

The oral reports will be chiefly on 3 and 4.

The names are of people who were not included in the Dictionary of American Biography, which has been criticized for these specific omissions.

- ✓ 1. Thaddeus Hyatt, 1816-1901 *Th. H.*
2. Laura S. Mapleson, 1862-1894 *Col. cat.*
3. J. A. Ryder, 1852-1895
4. Giovanni Turini, 1841-99
5. J.E. Turner, 1822-89
6. P.J.J. Valentini, 1828-99

*Look for oit.
Rept. to chief.
Report on kind of material e.g. ency.
Keep clues.
Chief act as clearing house.*